

地域と人をつなぐ明智鉄道駅と駅前広場のデザイン提案*

Design Proposal of Akechi Railway Stations and Station Squares *

吉谷崇**・新堀大祐***・篠原修****

By Takashi YOSHITANI**・Daisuke SHIMBORI***・Osamu SHINOHARA****

1. 概要

中山道大井宿の風情、歴史情緒豊かな岩村城趾と城下町、農村景観として名高い富田、寒天の里の山岡、レトロモダンな空気を持つ明智の街並みなど、個性豊かで多様な地域資源を結ぶ軸線として、明知鉄道はこれからの恵那まちづくり・魅力づくりの核となる路線である。また、地域の足としても依然生活に欠かせない移動手段であるとともに、その車内や駅は地域の人々の会話がはずむ大切な社交の場ともなっている。この明知鉄道を軸とした、これからの恵那の地域づくりにあたっては、駅および駅前広場の空間を「地域と人をつなぐ」場所として仕立て直すことが重要である。人々が日常的に集う地域コミュニティの中核として、外からの来訪者をもてなす玄関口として、そして来訪者と地域住民の新しい交流の場として駅周辺を捉え、鉄道とまちとを再びつなぎあわせる場所としての駅および駅前広場のデザインを、岩村駅・山岡駅・明智駅の3駅において提案する。

2. 明知鉄道全体としての駅及び駅前広場デザインの考え方

明知鉄道は、合併後の恵那市域に数多く点在する魅力的な地域を約1時間というコンパクトな移動時間で結んでいる。これらの地域は、単体の観光資源としてはそれぞれ全国的に通用する規模とは言い難いが、明知鉄道を軸としたコンパクトな拠点連携により生まれる地域全体としての複合的な価値は極めて高い。加えて、すでに数多くのイベント列車が走っていることから分かるように、明知鉄道は乗って楽しむ移動風景そのものも一定の評価を得ている。これらのことから、この明知鉄道を軸とした複合的な魅力づくりこそ、恵那のまちづくりが目指すべきひとつの方向であるといえる。

一方、現在の車社会においても、地域の足としての鉄道の存在は依然として重要である。高齢者や学生にとっては生活に欠かせない移動手段であるとともに、車内や駅は地域の人々の会話がはずむ大切な社交の場ともなっている。

以上のような明知鉄道を軸とした恵那まちづくりのあり方をふまえ、これからの明知鉄道の駅および周辺空間には、「地域と人をつなぐ駅」であることが求められる。具体的には以下のような考え方が基本となる。

a). 人々が日常的に集う「地域コミュニティの中核」として捉えること

鉄道は、まず地域住民にとって身近な足として使われ続けることが第一である。そのため鉄道の利用拠点となる駅舎および駅前広場と周辺空間は、地域住民にとって日常的なコミュニティの場としての利用を推進するものとする。特に広場は交通結節点としての機能を確保しながら、人中心の広場空間として検討する。駅によっては、市場などのイベント利用や地場産業との連携なども検討する。

*キーワード：トータルデザイン、駅前広場、地域づくり

**非会員、工修、(株)設計領域代表取締役

(東京都渋谷区千駄ヶ谷5-2-4-105、

TEL:03-5919-7891、E-mail:yoshitani@s-sr.jp)

***非会員、工修、(株)設計領域代表取締役

****フェロー会員、工博、政策研究大学院大学教授

b). 来訪者の玄関口としての「もてなしの空間」とすること

駅はツーリズムの拠点として、来訪者と地域住民の交流の場となる。地域の歴史的・空間的文脈を適切に読み込み、駅前広場に取り入れることにより、来訪者をまちに導くような空間とする。

c). 地域が有する歴史の蓄積に負けない、「時間の流れに耐えうるデザイン」

上記 I、II のために整備される駅舎および広場のデザインは、ハードなインフラとしての機能を満たすことを基本要件とした上で、地域に蓄積された歴史に違和感なく適応するものとする。そのためには単目的、短絡的ではなく、時を重ねるごとに魅力が増すような質の高いデザインとする。

以上 a)～c) の考え方をふまえながら、明知鉄道の駅および周辺空間のデザインについては、

乗る・待つ・出会う

が豊かな体験となることを基本方針とする。同時に様々なもてなし行為やイベント、情報提供などのソフトの活動との連携を図り、鉄道利用および地域の活性化を目指す総合的な取り組みを行っていく。

3. 岩村駅、山岡駅、明智駅周辺のデザイン提案

明知鉄道全体におけるデザイン方針に則りながら、明知鉄道の中でも特に重要な3駅と考えられる岩村駅、山岡駅、明智駅における駅及び駅周辺のデザイン検討を行った。以下、それぞれの検討模型写真とデザインの考え方を記す。

(1) 岩村駅

現状、岩村の駅前空間は、山岡駅などと同様に機能が明確でなく、茫洋とした印象を与える場所となっている。また、駅前と旧城下町との空間的なつながりも希薄であり、まちなかへも観光バスによって訪れる人が多い。

ここではまず、駅前の交通結節機能を整理し、来訪者を迎え入れるための広場空間を駅前に確保する。川と広場との関係を阻害している駐輪場は駅南側へ移設し、川の雰囲気を感じられる駅前広場とする。

さらに、駅周辺交通の制御（一方通行化）により、駅前通りの歩行空間を確保し、岩村の街並み

への期待を高める、アプローチ空間として整備する。駅から広場へ、広場から駅前通りへ、駅前から城下町へ、駅周辺に明快な空間の秩序を与え、明知鉄道と岩村の城下町をつなぐことが提案の主旨である。



岩村駅周辺全体模型



まち側から駅舎を見る。駅舎前面から駐車車両やバスを移し、駅舎の正面性を確保する。



駐輪・駐車・バス待ちあいなどの交通結節機能を集約させ、シエルターのもとに一体的に収める。



河川（岩村川）に開かれた待合いデッキスペースを設ける。既設の駐輪場は撤去し移転する。



まち側から駅舎を見る。駅舎前面から駐車車両を脇に移し、駅舎の正面性を確保する。

(2) 山岡駅

現状では、まち側から見て、駅舎の存在は周辺環境の中に埋没している。さらに、駅周辺の機能が明確に整理されていないために、駅前という結節の場所としての魅力に乏しい。ここではまず、駅舎の改修と駐車場所の整理によって、駅舎をまちのアイストップ＝地域の「玄関口」としてその存在を際立たせる。

さらに、山岡駅周辺は、来訪者だけでなく地域の人々が集う、地域コミュニティの交流機能への期待が大きい。既存の蔵の改修・活用を核として、駅舎・駅前広場・ヘルシーハウス・河川を一体的な空間としてしつらえることで複合的な魅力を持つ地域拠点を創出することを提案した。



既存の蔵は改修し、朝市などの地域イベントに供する他、寒天に代表される地場産業のPRの場所ともなる。



山岡駅周辺全体模型



ホームを降りると、駅前広場から蔵を通して河川まで視線が抜ける。河川や田圃など、周辺地域と一体となった駅前の景観を創出する。



段の下がった護岸の設えによって、既存の蔵と河川を結びつけ、親水性の高い空間を創出する。



明智駅側から大正浪漫亭方面を見る。駅前からまちなかへ、向かうべき方向が分かりやすい空間構成。

(3) 明智駅

明智駅周辺は明智のまちから一段高い場所に位置するが、既存施設や駐輪場などにより、まちへの視線が分断されてしまっている。ここでは、バスのロータリー機能を北側に配置し、広場南側を、大正村をはじめとする明智のまちへ開かれたもてなし・交流の空間とすることを基本的な考え方として提案を行った。

現状の駐輪場を駅舎北側へ移設し、広場北側を交通結節空間として整理すると同時に、広場南側におけるまちへの視線を確保する。改札を出た駅前の空間は、既存樹木越しに浪漫亭方面への視線の抜けを確保し、来訪者に期待を高めるもてなしの広場となる。

また、駅前の既存飲食施設は、駅舎南側へ機能移転する。店舗と駅舎南側広場をホームと同レベルのデッキ空間とすることにより、鉄道の発着を眺めながら食事や休憩をとること可能な、地域と来訪者のための「乗る・待つ・出会うを楽しむ」交流広場とする。



待合施設（飲食）、駅舎、駐輪場が南北方向に連続して、新しい明智駅の外観を形作る。



飲食施設と、ホームレベルから連続したデッキ広場を設置し、乗る・待つ・出会うを楽しむ交流空間を創出する。



明智駅周辺全体模型



駐輪場、バスの乗降スペースなど、交通結節機能は駅の北側に集約する明快な空間構成。



浪漫亭前広場はまちなかへのエントランスとも言える空間である。駅前広場とトータルにデザインを検討し、駅からまちなかへ人々を導くまちづくりを提案した。

(4) 提案のまとめ

岩村駅、山岡駅、明智駅に共通したデザインのポイントを改めて整理すると、以下の3点になる。

- ・地域コミュニティの中核となること
 - 地元の人と地元の人が出会う場所
- ・おもてなしの空間であること
 - 外から来た人と地元の人が出会う場所
- ・まちの玄関口となること
 - まちなかへと人を導く空間構成

ただし、いずれの駅の場合も、駅舎や駅前広場はまちづくりの主役ではなく「舞台」であり、主役はあくまでもそこに暮らす人々の活動である。本日の駅周辺デザインをたたき台に、駅周辺の空間を使って住んでいる人々が、自らの手で「自分たちに何が出来るか」を考えていただくことが、これからの恵那まちづくりにとって最も大切なことであろう。

4. ワークショップにおける地域住民との意見交換

以上、岩村、山岡、明智の3駅におけるデザイン提案をもって、平成22年1月22日に開催された「明知鉄道の駅を考えるワークショップ（於：明智文化センター）」においてデザイン提案を行った。模型を前に地域住民と直接意見交換を行うことによって、まちづくりに対する建設的な意見を多数頂戴することが出来た。



ワークショップにおける地域住民との意見交換

住民を交えたまちづくりにおいては、地域の歴史やコンセプトについて十分な議論が必要であることは当然であるが、一方で、言葉による議論のみが先行し、なかなか着地点を見いだせないことも多い。今回のような模型を用いたデザイン提案は、一つの模型を囲むことによってまちづくりに関する具体的な意見交換を引き出しやすく、地域意見を集約したデザインを実現するのに有効な手段である。ただしそこには、地域住民の意見をただ鵜呑みにするのではなく、最もふさわしい形に出来るだけ迅速に落とし込む提案力と、必要に応じてデザインや模型をその都度修正しながら議論を進めていく行動力が求められる。

この「明知鉄道の駅を考えるワークショップ」を起点として、恵那では現在、それぞれの駅周辺整備に関する地域住民を交えた検討が進行中である。今回のように複数の駅をトータルに提案することは現状では稀なケースと言えるが、地域全体を捉えたこれからの景観づくり・まちづくりにおいては有効な手段であろう。恵那のまちづくりはひとつのモデルケースとして、多くの重要な示唆を含んでいると言える。